浅科村文化財調査報告　第10集

寺田遺跡

―― 古東山道・中仙道沿いの村 ――

1995

浅科村教育委員会

浅科村文化財調査報告　第10集

寺田遺跡

――古東山道・中仙道沿いの村――

1995

浅科村教育委員会

上：寺田遺跡全景　下：３号住居跡

序に変えて

浅科村には、土合古墳を中心に布施川に沿って多くの遺跡が存在することが確認されている。

今回、工場建設により緊急発掘調査されることになった寺田遺跡周辺は、村内では昔から「殿屋敷」と呼ばれ、武田信玄の弟信繁の三男で望月氏の養子であり、長篠の戦いで戦死した義勝の屋敷跡と言われているところである。勿論当の屋敷はいまでも泉が湧きだしている泉場跡ということなので、そこから少し離れてはいるものの、そんなことからこの発掘には特別にも関心の深いものがあった。

真夏の酷暑の中を寺島先生を中心に、村の文化財保護委員の皆さんが懸命に掘り進めている現場からは、地下水が湧きだし、調査は困難を極めている様子であった。特に印象深かったのは、その場所から井戸の掘り出されたことであった。こんなしける場所にも家を建てて生活していたということになると、この辺一帯はなんらかの理由で生活条件に適していたということなのだろうか。

休憩場所として張ったテントの中で休息している文化財保護委員さん方の肩や頭の上に、今はほとんど見かけなくなってしまったオオムラサキが、人を恐れることもしらずにとまったり翔び回ったりしている姿は、滅び去ってしまった住時の面影と思い重ねて感慨無量なるものがあった。

御多忙の中、貴重な時間をさいて調査にあたってくださった寺島先生はじめ、文化財保護委員の皆様方に心から御礼申し上げます。

平成７年３月

浅科村教育長　柳澤　哲郎

例　　言

1　本書は、長野県北佐久郡浅科村所在の寺田遺跡の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査は、志賀産業株式会社の委託を受け、浅科村教育委員会が実施した。

3　本調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。

4　本書の執筆分担については目次に記してある。

5　本書の作成については、遺物のすべてを寺島俊郎が行った。

6　本書の編集は、調査員寺島俊郎が行った。

7　本調査に際しては以下の方々の御配慮を得た。厚く御礼を申し上げる。(敬称略)

県教育委員会文化課、丸山敏一郎、小池幸夫、㈶長野県埋蔵文化財センター、白田武正

土屋　積、宇賀神誠司、前田利彦

凡　　例

1　遺構の名称

住→竪穴住居跡　　坑→土坑　　竪状→竪穴状遺構

2　遺構ナンバーは、時代別・時期別にはなっていない。

3　挿図の縮尺

竪穴住居跡・土坑＝1：80、カマド＝1：40、井戸＝1：40

土器＝1：40、石器＝1：4、1：6、

4　遺構面積の計測にはプラニメーターを用い、3回の計測の平均値を面積とした。

5　土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

6　挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表す。

遺構断面＝斜線　　カマド・焼土跡＝網点

土器内外面　　土師器　黒色処理＝網点

目　　次

口　絵
序　文
例　言
凡　例
目　次

第Ⅰ章　発掘調査の概要……丸山耕市……1
(1)　調査に至る動機……〃……1
(2)　発掘調査の概要……〃……1
(3)　発掘調査の経過……寺島俊郎……4

第Ⅱ章　遺跡の環境……峯村今左夫……5
(1)　自然環境……〃……5
(2)　歴史的環境……〃……5

第Ⅲ章　層　　序……寺島俊郎……8

第Ⅳ章　遺構と遺物……寺島俊郎……9
(1)　平安時代……〃……9
(2)　中世……〃……16
(3)　その他の遺物……〃……20

第Ⅴ章　井戸内出土の自然遺物……興水太仲……21

第Ⅵ章　総　　括……寺島俊郎……24

第Ⅰ章　発掘調査の概要

(1)　調査に至る動機

平成４年、長野県北佐久郡浅科村大字蓬田字寺田地区に長野市の志賀産業株式会社が、進出することが表面化した。この地区には、周知の埋蔵文化財、寺田遺跡（殿屋敷跡）が存在しており、その保護について、原因者である志賀産業㈱と長野県教育委員会、浅科村教育委員会の三者において、寺田遺跡の保護協議が持たれ、まずは試掘調査を平成５年７月14日に実施し、遺跡･遺構･遺物が確認されたため、７月26日より本発掘調査を実施し、記録保存をはかることになった。

(2)　発掘調査の概要

1　遺 跡 名　　寺田遺跡

2　所 在 地　　長野県北佐久郡浅科村大字蓬田字寺田573番地

3　発掘期間　　平成５年７月26日～８月31日

4　整理期間　　平成７年１月～２月

5　面　　積　　1,195㎡

6　発掘理由　　平成５年志賀産業株式会社の工場建設に伴い、寺田遺跡の破壊が予想されるため緊急発掘調査を実施して記録保存を行う。

7　費用負担　　志賀産業株式会社

8　事 務 局　　社会教育係長　　丸山　耕市

9　調 査 団

団　長　　柳澤　哲郎（浅科村教育長）

担当者　　峯村今左夫（村文化財保護委員、佐久考古学会員）

調査員　　寺島　俊郎（佐久考古学会員）

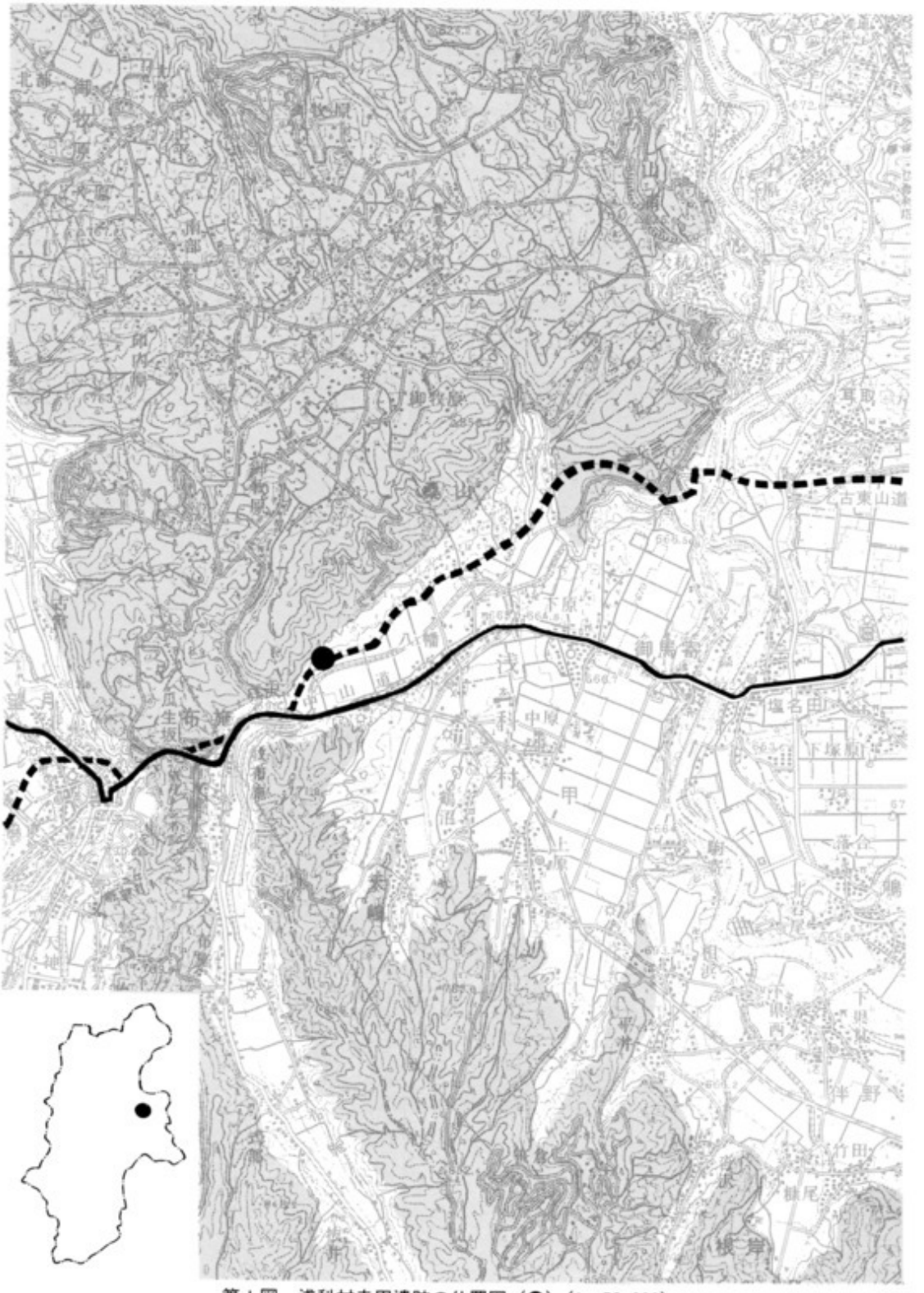
協力者　　（８名）

小松　利雄　　丸山万三郎

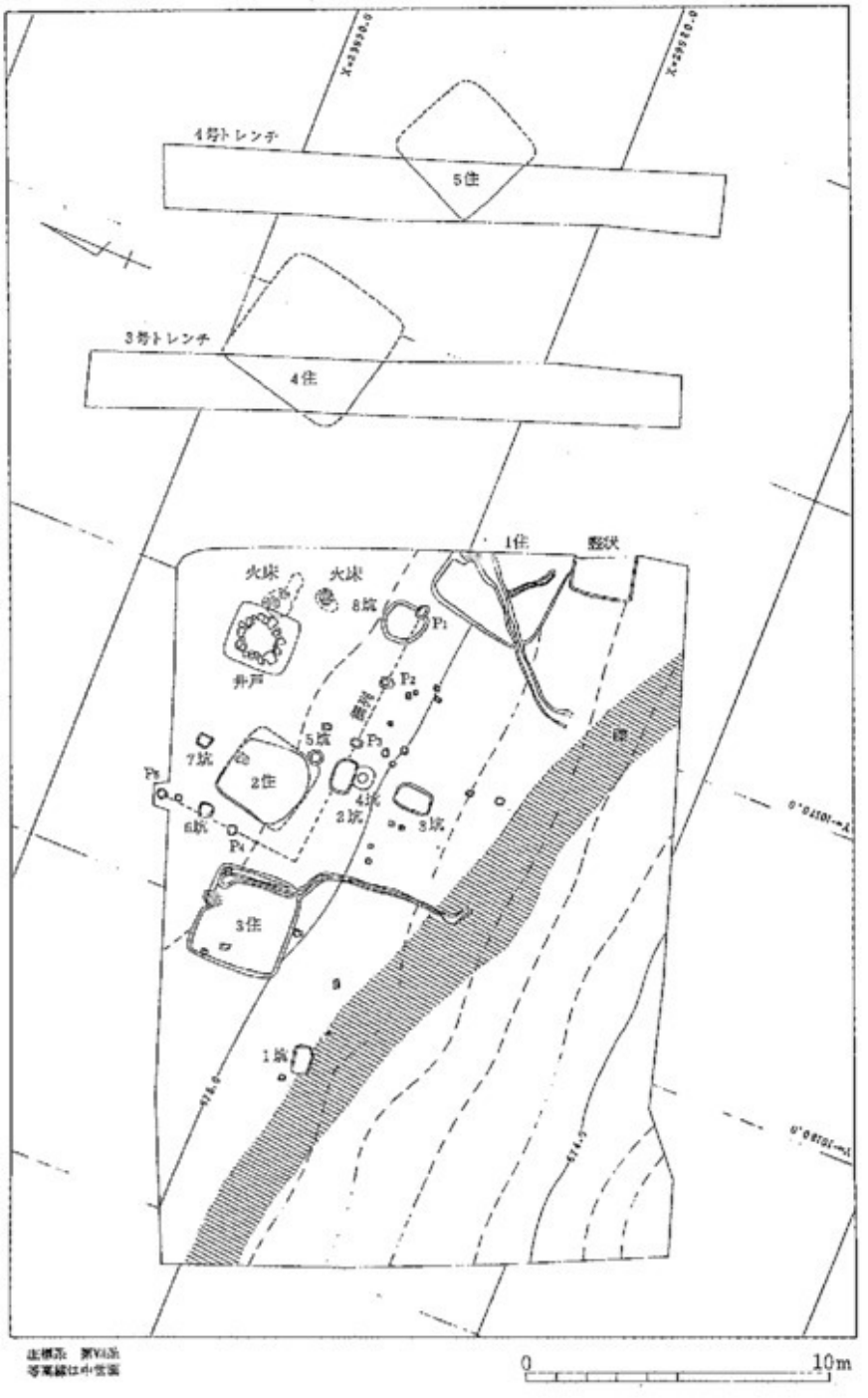
橋場　安国　　山浦　　巌

柳沢　徳雄　　依田酒造雄

小泉　政志　　岩崎　重子



第１図　浅科村寺田遺跡の位置図（●）（1：50,000）



第２図　寺田遺跡全体図（1：250）

(3) 発掘調査の経過

この年は全国的に記録的な冷夏となった。佐久地方も同様で、８月に入ってからも気温が上がらず上着が欲しくなるような曇天が続き、作業にも支障が生じた。夏らしくなったのは８月11日頃からであった。

7月14日（水）バックホーによる表土剥ぎ
7月15日（木）調査対象区の東・西２本づつ試掘トレンチを開ける。東側のトレンチから平安時代（９Ｃ後半～10Ｃ初め）の竪穴住居跡を２軒確認。
7月26日（月）本調査開始　テント設営
検出作業、調査区東端へトレンチを入れる。中世面と平安面があることが判明
7月27日（火）竪穴状遺構掘り下げ
１号土坑掘り下げ
7　28日（水）竪穴状遺構・井戸掘り下げ
7月29日（木）１号住居跡掘り下げ
7月30日～８月１日休み
8月２日（月）竪穴状遺構・１号土坑・火床図化
8月３日（火）雨天のため作業中止
8月４日（水）作業中止
8月５日（木）１号住居跡掘り下げ
8月６日（金）雨天のため作業中止
8月９日（月）全体図作成、２～５号土坑半割
8月10日（火）１号住居跡内に溝を確認。
8月11日（水）高所作業車を使い全体写真撮影、１号住居跡・井戸遺物出土状況撮影
8月12日（木）３号トレンチ土層図作成
井戸を除き面下げ(重機を使用)、井戸の西側から２号住居跡を検出
8月13日～16日盆休み
8月17日（火）雨天のため土器洗い、杭打ち
8月18～19日　１・２号住居跡掘り下げ
8月20日（金）１・２号住居跡完掘・写真・実測
8月23日（月）井戸を半割（重機を使用）
8月24日（火）井戸土層図作成及び掘り下げ
8月25日（水）井戸を除き面下げ（重機を使用）２号住居跡の西側に３号住居跡を検出、井戸側面図作成
8月26日（木）３号住居跡掘り下げ、排水溝を確認。井戸側面図作成終了
8月27日（金）台風のため作業中止
8月28日（土）３号住居跡完掘写真撮影・カマド掘り下げ及び図化
8月29日（日）３号住居跡カマド図作成
8月30日（月）３号住居跡平面図作成
8月31日（火）テント撤去、調査終了

第３図　浅科村寺田遺跡の位置図（1：4,000）（●は土層写真撮影地点）

第II章　遺跡の環境

(1)　自然環境（図1・3）

浅科村は、北佐久郡の西方に位置する小さな村である。北は北御牧村と小諸市に、西と南は望月町、東と南は佐久市に隣接している。地形は中央に粘性の強い土壌をもった平坦地が広がり、西に蓼科山塊末端の尾根、北は御牧原台地がそびえ、南・東には千曲川の段丘が発達している。

村内を流れる主流は千曲川と布施川の2流で、千曲川は村内のもっとも低い部分を北流している。布施川は蓼科山を源流とし、望月町布施の谷合を北流し、同町の瓜生坂で御牧原台地にぶつかり百沢地籍で東方へと流路を変え、台地沿いに東流したのち千曲川に合流する。その他の河川は西側の痩せ尾根に源を発する河川ばかりでその水量は少ない。現在の穀倉地帯となっている中央の平坦地も、江戸時代に五郎兵衛用水が完成するまでは全く水のない荒れ地であった。そして現在も溜め池が幾つも認められる。

寺田遺跡は布施川が百沢地籍で流路を東方へ変えたすぐ下流の左岸で、御牧原台地の南麓の狭小な場所に立地する。調査対象区の下では自然湧水がみられる。

(2)　歴史的環境（図1・4、表1）

浅科村における遺跡は、千曲川と布施川の流域、あるいは蓼科山塊の末端の尾根上とその裾野、および御牧原台地上に分布している（第4図・第1表）。特に布施川流域は縄文時代以降中世まで遺跡が認められる。またこの流域が古東山道の推定地（第1図）とされ、古くから人々の往来のある場所でもあった。中央の平坦地は前述したように近世以降開発されるため遺跡は極わずかである。以下、時代を追いながら浅科村の遺跡を概観してみることにする。

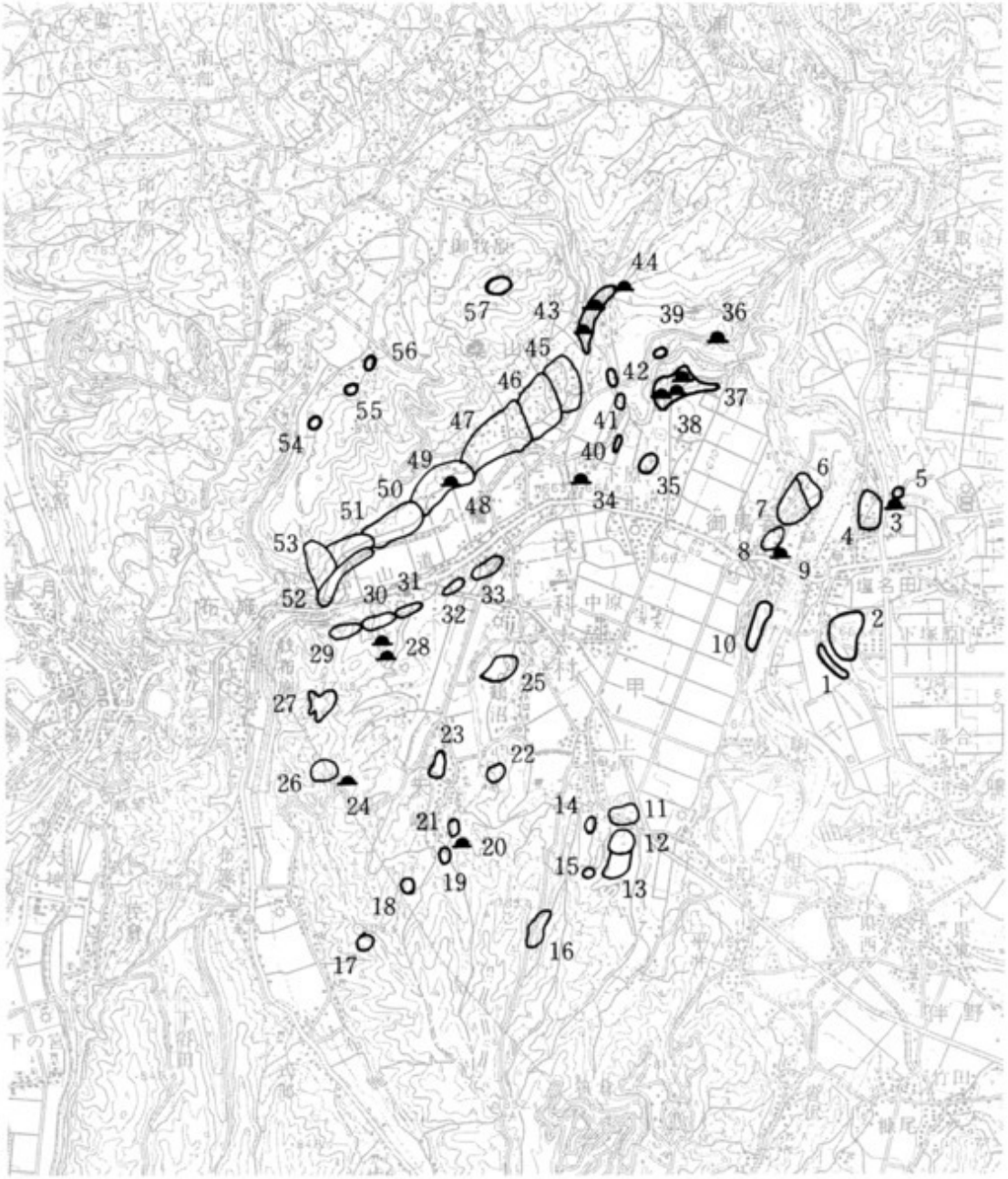
縄文時代

布施川が千曲川に合流する地域は、渓谷を呈していてその右岸に狭隘な段丘を形成しているところに土合遺跡（右岸）がある。以前から勝坂式・加曽利E式の土器が表採されていた。平成4年北陸新幹線工事関連で一部が発掘調査（㈶長野県埋蔵文化財センター・以後県埋文センター）がされ、後期の竪穴住居跡1軒を検出した。同時に同地区村開発計画に伴う試掘調査では20,000㎡を対象に24本の試掘溝が設定され、前期から後期の遺物が広範囲に散布することからかなり大きな縄文時代集落の所在することが判明した。この土合遺跡対岸の御牧原台地南麓の遺跡地帯は、いまだ発掘調査は行われていないが加曽利E式・堀内式・勝坂式の遺物が表採されている。塩名

田地籍の中平・田中島遺跡からは遺構は検出されていないものの、中期から後期の土器が多量に出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、分布調査によって村内に11箇所が確認されていた。いずれも後期の箱清水



第４図　浅科村の遺跡分布図（1：50,000）

式土器を出土した遺跡で塩名田原・田中島・上の平・上屋敷・入の沢・明神平・大門先・天神平・須釜原などがそれである。平成４・６年の発掘調査（県埋文センター）では、新たに土合遺跡から後期の住居跡１軒が、６年度の調査では田中島遺跡から方形周溝墓３基が検出されている。

古墳時代

古墳は千曲川の段丘面と布施川流域に多く築かれている。布施川右岸の土合１号古墳からは円頭柄頭・銀象眼八窓倒卵形の鐔・馬具・金環・玉類が、対岸の久保畑古墳からも頭椎柄頭等が出土している。これらは次の時代になって隆盛する望月の牧・須恵器生産などとの関わりが想像される。

集落は平成４・６年度に町と県で発掘調査された砂原遺跡からは、地表下２ｍから古墳時代前期と後期の集落が確認されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代に入ると御牧原台地・八重原台地において須恵器の生産が本格化する。８世紀後半から窯跡の数が増え、９世紀に入るときわめて多くの窯跡が形成され、佐久地方一体に須恵器の供給がなされるようになる。また、同台地上では前代より設置された望月の牧は信濃国最大の御牧で、馬の逃亡を防ぐためにつくられた「野馬除け」が断続的に残っている。八幡地籍の八幡神社の高良社（高麗社）や御牧原尾尻から出土した平安時代初期鋳造といわれる鉄鐘（重要文化財）・古墳出土の副葬品などは望月の牧の経営に参画した帰化人との関係を物語っている。

集落は塩名田地籍の砂原遺跡（県埋文センター）からは、当時千曲川の洪水によって埋没した水田・畑・住居跡がセットで２ｍしたから検出され、当時の農村の姿が浮き彫りになってきている。土合遺跡の村開発計画に伴う試掘調査では平安時代の集落が想定されている。

第１表　遺跡名一覧

1	舟久保遺跡	16	中荻久保遺跡	31	吹上遺跡	46	天神平遺跡
2	塩名田遺跡	17	布施氏城跡	32	神明遺跡	47	水地村遺跡
3	洞口古墳	18	上山の神塚	33	宿遺跡	48	蓬田唐沢古墳
4	砂原遺跡	19	雨の宮遺跡	34	経塚古墳	49	唐沢遺跡
5	五領城遺跡	20	宮脇古墳	35	植木辺窯址	50	中村遺跡
6	中平遺跡	21	上屋敷遺跡	36	火の雨塚古墳	51	松ケ沢遺跡
7	田中島遺跡	22	天徳城跡	37	土合遺跡	52	寺田遺跡
8	上の平遺跡	23	矢島城跡	38	土合古墳群	53	西の平遺跡
9	上平の塚古墳	24	茨尾根古墳	39	久保畑古墳跡	54	尾尻遺跡
10	神平遺跡	25	櫨見山遺跡	40	山の田遺跡	55	須釜原遺跡
11	西蓮寺遺跡	26	細久保城跡	41	駒込遺跡	56	柳沢窯址
12	一本松遺跡	27	虚空蔵城跡	42	山梨遺跡	57	富士見塚
13	打越窯址	28	兜山古墳	43	入の沢古墳群		
14	菖蒲沢窯址	29	砂山遺跡	44	入の沢遺跡		
15	前林窯址	30	島久保遺跡	45	明神平遺跡		

中　世

中世に入ると佐久地方は日本の歴史の中へと巻き込まれてゆく。鎌倉時代の承久の乱では小笠原長清が東山道軍の大将として、信濃の兵を率いて京都に攻め上った。その時の佐久武士の中に矢島次郎がいる。この矢島氏は矢島地籍の矢島城主である。矢島城は既に５回にわたる発掘調査が実施され室町時代まで使用されたものと推定されている。また、望月の牧官から武人として成長した滋野氏は延徳３年（1491年）八幡神社の高良社（重要文化財）を、八幡宮として建立している。

江戸時代に入り中仙道が整備されるにあたり、布施川流域の桑山・蓬田付近の住民を八幡地区に移住させ現在の八幡集落がつくられ、千曲川の渡には塩名田宿が設置された。

第III章　層　　序

寺田遺跡は布施川左岸の河岸段丘上に立地し、背後には御牧原台地を背負う（標高差175m）。土層堆積状況は複雑で、水成層と崖錐堆積物が混交している。本調査区の西側は水成土層で砂質や粘性土を成し、東側は円錐状の地形（第３図）で礫を多量に包含している山土である。同段丘面の中央下方では自然湧水がみられる。基本土層図は遺構を多く検出した調査区東端を模式したが、西側に行くにしたがい崖錐堆積物から水成層へ変化してゆく。

Ⅰ層　暗褐色土（10YR3/3）10cm以下の礫を多量に含む。

Ⅱ層　黒褐色土（10YR2/3）中世面、１～５㎜の白色砂を多く含む。炭・焼土を多く含む。

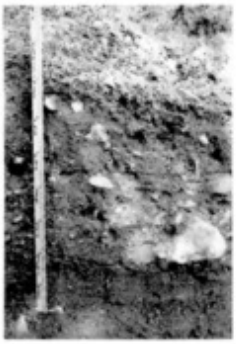
Ⅲ層　黒褐色土（10YR2/2・2/3）１～５㎜の白色砂と２cm前後の礫を多く含む。

Ⅳ層　黒褐色土（10YR2/2）平安面、粘性あり、５cm以下の礫を多く含む。炭を含む。白色砂は上層より極端に少ない。

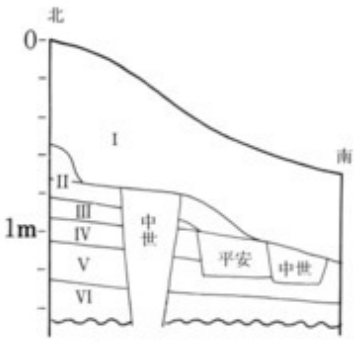
Ⅴ層　黒色土（10YR2/1）古墳前期面、粘性がつよい、１～２㎜の白・褐色砂を含む。炭を含む。

２号トレンチ

調査区北側



３号トレンチ



第５図　寺田遺跡基本土層図

第Ⅳ章　遺構と遺物

(1)　平安時代

この時期に属する遺構は、竪穴住居跡３軒を検出した。

１号住居跡（第６・７図）

Ⅲ層上面で検出した。住居跡のほぼ東半分は調査区東端にかかり、中世の竪穴状遺構に南壁の一部が切られていた。平面形は隅丸方形を呈し、カマドを主軸方向にＮ－８°－Ｅを指す。規模は南北3.9ｍを測り、面積は14m²位と想定される。壁の残存高は約10～30cm前後をはかる。掘り下げていく段階で、床面のやや上方で焼土面が２か所確認され、住居内全体からは炭・焼土粒が出土した。

床面は平坦で、掘り下げた面をそのまま床としている。柱穴・ピットは検出されなかった。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、ほぼ半分を検出した。天井・袖は破壊され、カマド手前付近からは構築材の礫が集中して出土した。

その他の施設としては、カマド手前から南西隅・住居外へ延びる溝が確認され、住居中央でその溝に南壁際から合流する溝をもう１本検出した。炭１は板状を呈し、溝の壁から底に沿う状態で出土した。住居が廃棄された時点でこの２本の溝は開口しており、なおかつ、板をかぶして使用されていたものと解釈される。

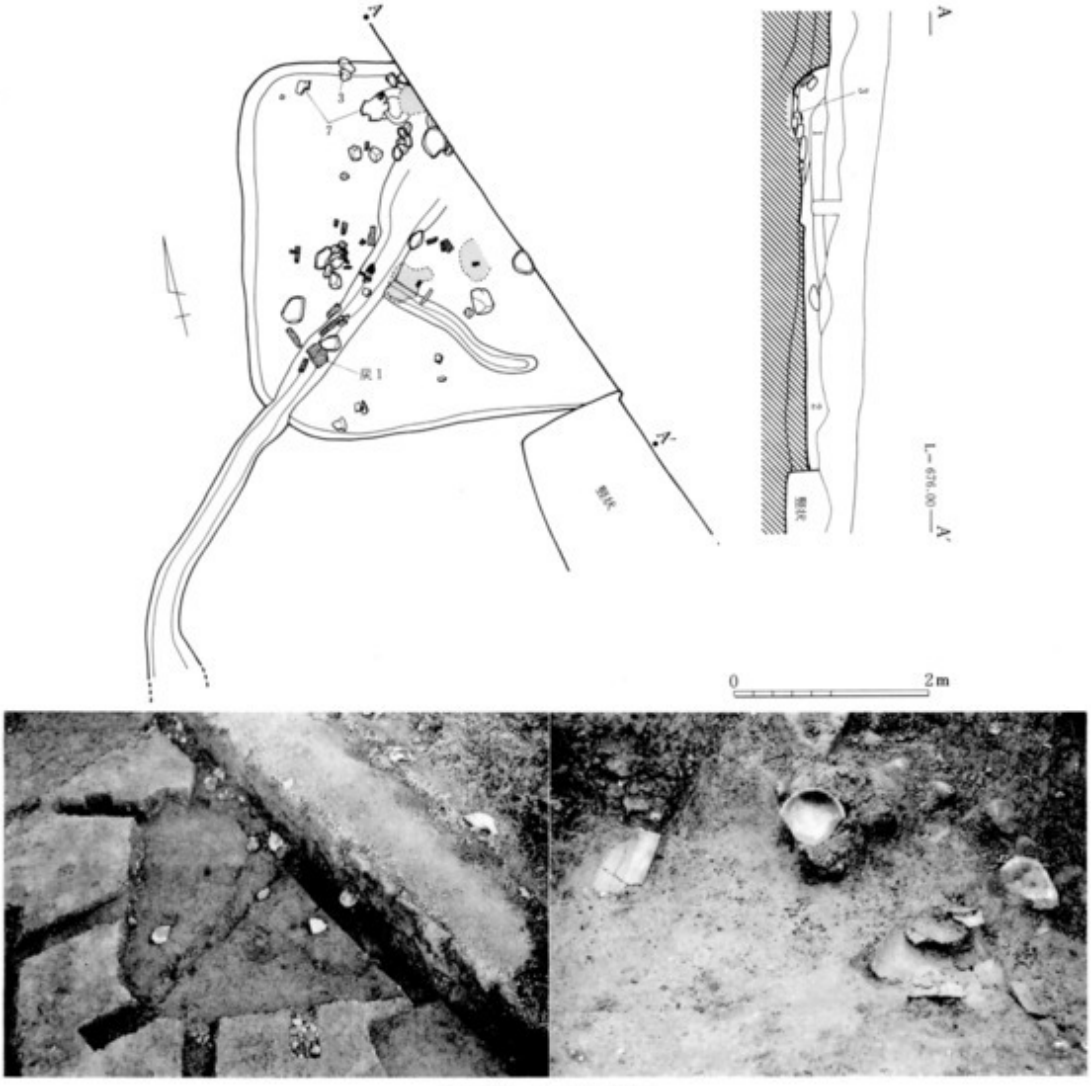
覆土は３層に分層された。１層は２～５cmの礫を多く含む黒色土（10YR2/2)、２層は炭･焼土を多く含み、礫はほとんど含まない黒色土(10YR2/2)、３層はカマドの焼土を多量に含む黒色土（10YR2/2）であった。その堆積から、まず、カマドを破壊後住居内で火が焚かれ、ある段階で再度火が焚かれた後、最後は礫の混じる土で人為的に埋め戻されているものと思われる。

遺物は全体に少なく、須恵器の坏・甕、土師器の坏・碗・皿・甕、灰釉陶器の碗（５）が出土した。土師器の坏･碗･皿は黒色処理され（２～４)、甕は在地の削りによって仕上げるもの（６・７）とロクロ整形による北信系のものとがある。灰釉陶器（５）は刷毛による施釉がされ光ケ丘１号窯式段階のものと思われる。そのほかフイゴの羽口破片が出土している。

時期　土器組成、土師器甕の形態から平安時代前半、９世紀後半に位置付けられる。

２号住居跡（第８図）

Ⅲ層中で検出された．検出状況が悪く、西壁から北壁の一部が確認されたのみで、南と東側の



第６図　１号住居跡

床面は検出できなかった。平面形は方形を呈すると思われ、カマド位置から直径2.8m位、面積は５㎡位と推測される。カマドを主軸方向にN－15°－Eを指す。壁の残存高は約０～５㎝前後を測る。

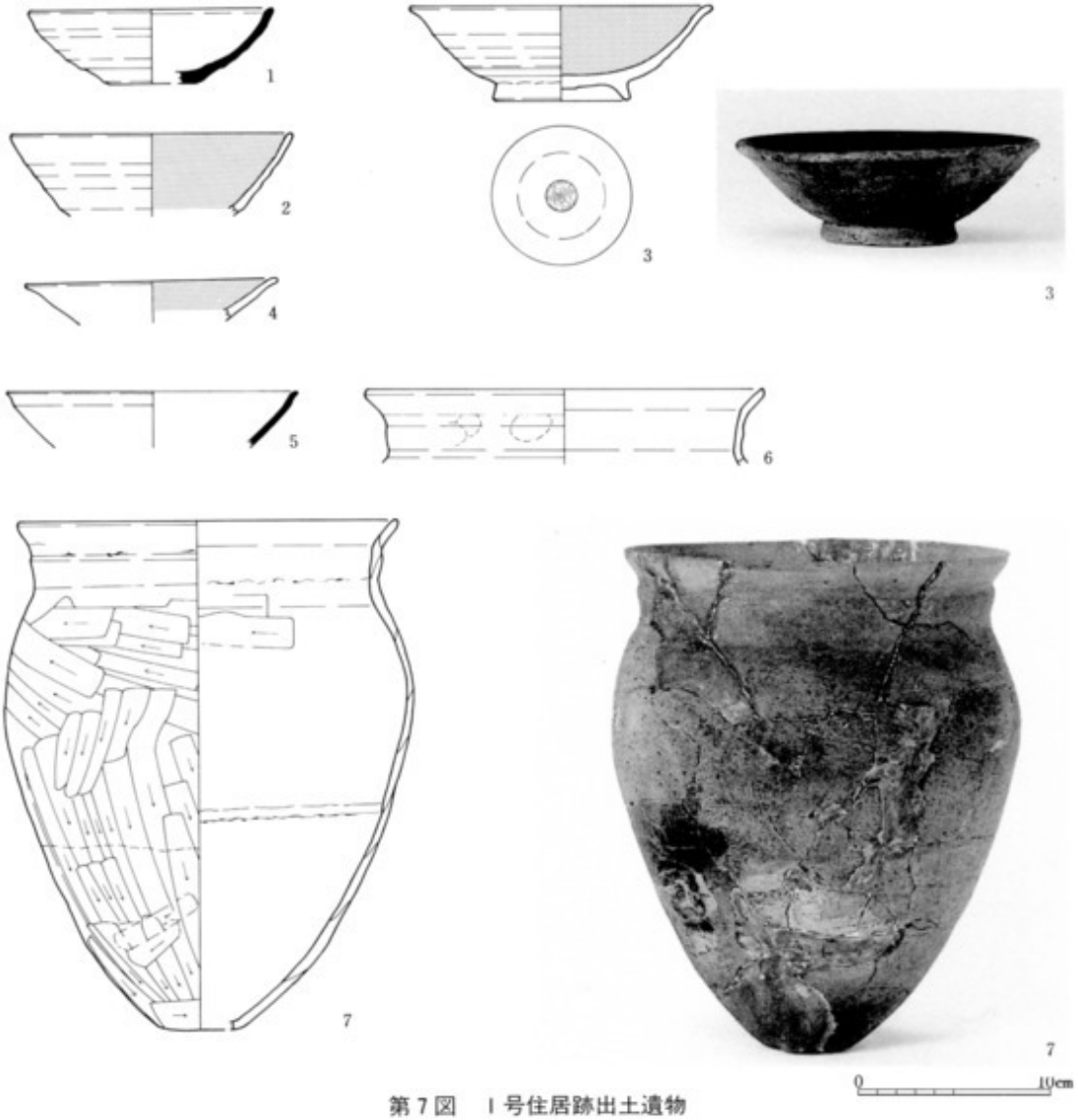
床面は平坦で、掘り下げた面をそのまま床としている。柱穴・ピットは検出されなかった。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、火床のみを確認した。

覆土は単層で白色・褐色砂を含む粘性のある黒色土（10YR2/2）で、炭粒を包含していた。また、カマド火床上では焼土や炭片を多く含んでいた。

遺物は少ない。土師器のロクロ整形の甕・小型甕（３）、黒色処理された坏（１）・碗（２）、須恵器甕片が出土した。

時期　土器組成、土師器甕の形態から平安時代前半、９世紀後半に位置付けられる。



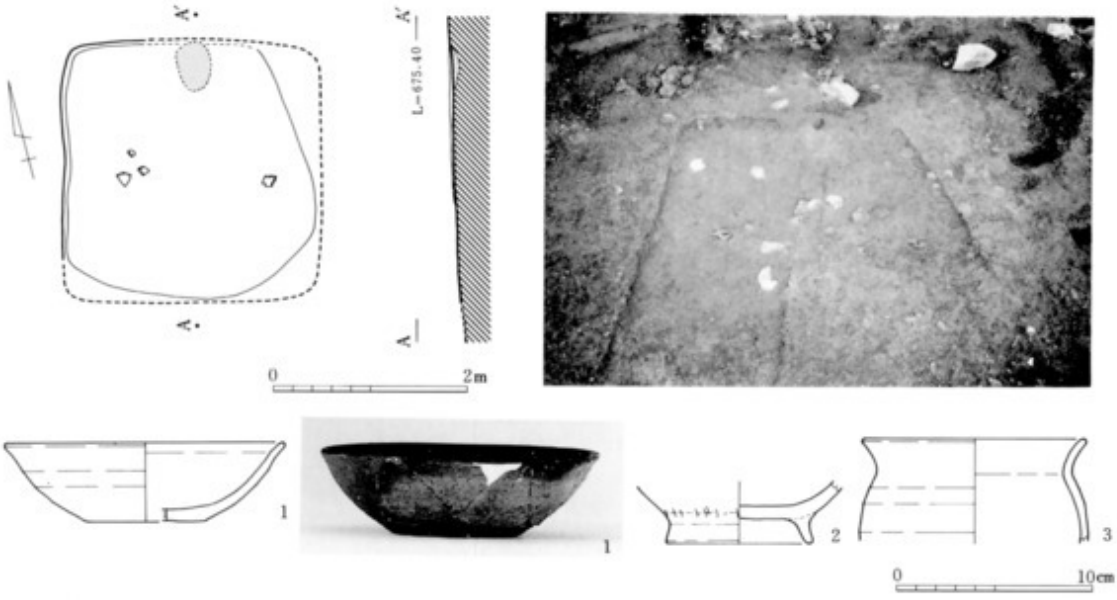
第７図　Ⅰ号住居跡出土遺物

３号住居跡（第９～11図）

調査区の中央北側で、２号住居跡のすぐ西に位置する。２号住居跡の検出段階（Ⅲ層）では確認できずⅤ層上面において検出した。平面形は方形を呈し、南北3.05ｍ・東西3.35ｍ、面積は8.8㎡を測る。カマドを主軸方向にＮ－３°－Ｗを指す。壁の残存高は約16～25㎝前後を測る。

床面は平坦で、掘り下げた面をそのまま床としている。柱穴・ピットは検出されなかった。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、天井・袖は破壊され、住居内に構築材の礫が点在して出土した。火床の中央奥には支脚石が据えられていた。火床は須恵器の四耳壺（11）・坏（２～９）と薄くて扁平な礫によって覆われていた。須恵器坏は完形ないし大きく割られた破片でそのすべてが底部を上に向けて置かれ、四耳壺も一個体の胴部中央から口縁部までを使用し、大きく割ら



第８図　２号住居跡

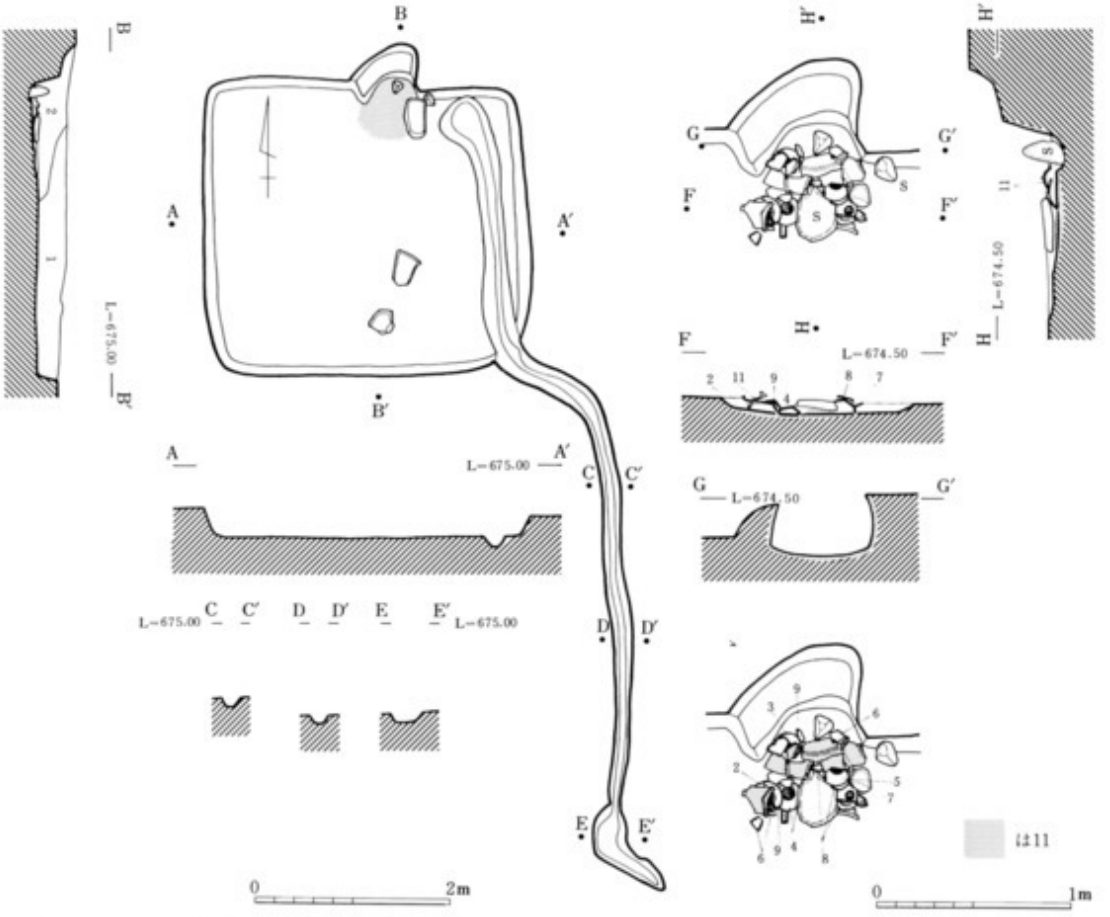
れた破片で火床部分を覆っていた。覆い方は支脚石手前から四耳壺の大形破片を並べ、次に中央手前に大形の礫を据え、左右に須恵器坏を敷きつめていた。これらの土器を取り上げるとその下からは水が湧き出してきた。火床部分は床面より若干深く掘られ赤褐色に焼けていた。カマドを使用し、ある段階から湧水が始まり、火床部分を床上げをするために須恵器と礫を敷きつめたのであろう。

その他の施設としては、カマド右脇から東壁沿いに溝が検出され、それは南東隅から住居外へ5.5m延びていた。

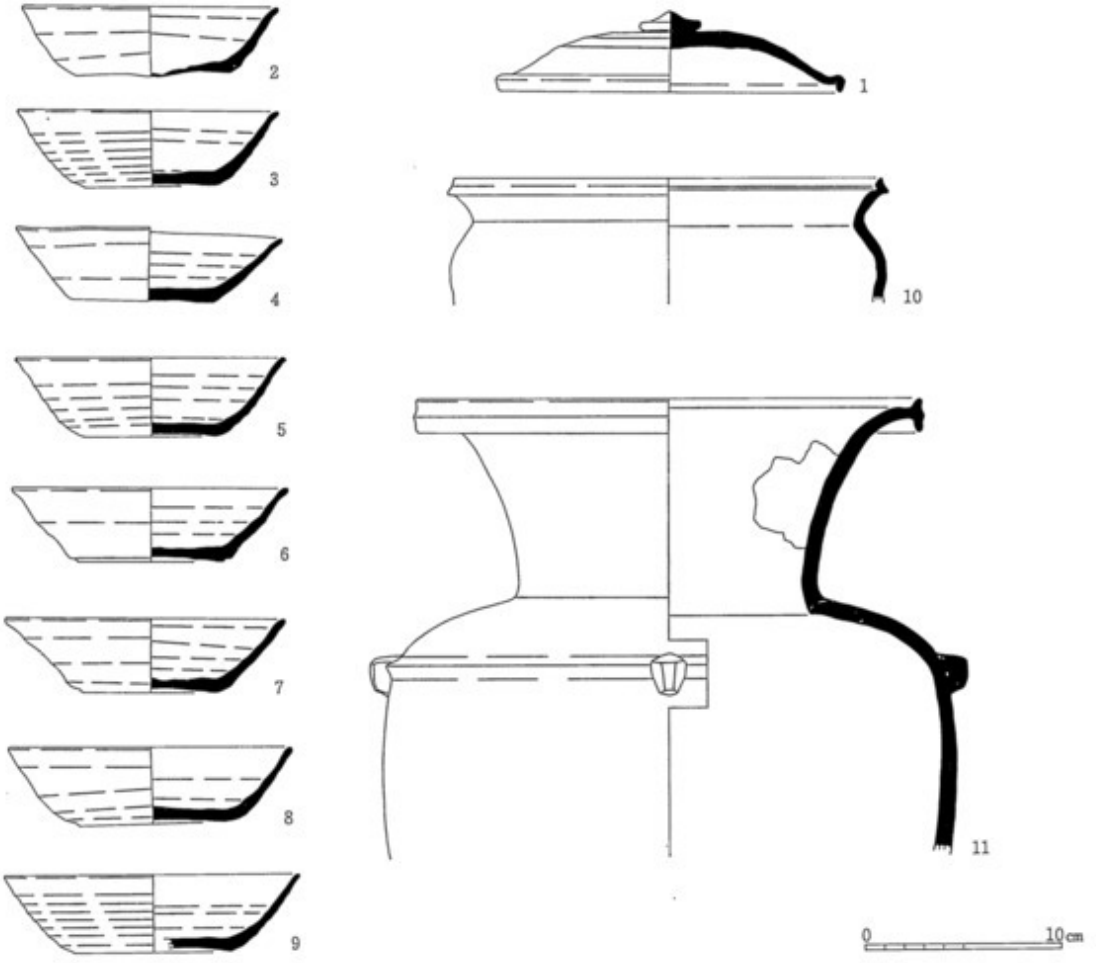
除するために設けられたのであろう。

覆土は２層に分層さられた。V・VI層を基調とし、部分的にはそれらがブロック状を呈し２～５cmの礫を含む土(10YR2/2)。２層は１層に類似するが、１層よりも褐色が強く礫も多く含むことから、VI層土が多く混合しているものと思われる。ブロック状の覆土状態から、人為的に北側から埋め戻されたものと思われる。

遺物は、カマド火床部分から出土したものがその大半で、住居内からは小片ばかりで図化できるようなものは出土しなかった。土器は須恵器がその大半を占める。須恵器は坏・高台坏・蓋・四耳壺・広口甕、土師器は在地の削りによって仕上げられた甕が出土した。須恵器坏（２～８）はすべて右回転の糸切り痕を残し、８以外はすべて火襷痕を残すほどしっかりと焼成されている。須恵器蓋（１）は住居外の排水溝内から出土した。四耳壺（11）は一個体の上半部分のみで下半部は１片も出土していない。口頸部の内面には焼成時の窯糞がたくさん付着している。この状況からは製品として使用されたものとは考えにくい。当時は背後の御牧原台地上で須恵器生産が盛



第９図　３号住居跡



第10図　3号住居跡出土遺物Ⅰ

んに行われている頃でもあり、カマド火床を補修するために窯元から不良品を入手したものであろう。

時期　遺物組成はその大半を須恵器が占める。土師器甕の特徴から平安時代、9世紀第Ⅰ四半期に位置付けられそうである。

4・5号住居跡（第2・12図）

4号住居跡は調査区東の3号トレンチ内で検出した。崖錐地形上に位置するためかなり礫を多く含む地層を掘り込んでつくられている。範囲確認調査であるため、本調査は実施しなかった。規模は4.5m位と考えられる。遺物は土師器のロクロ甕（2）が出土している。1点ではあるが9世紀後半から10世紀前半に位置付けられるものと思われる。

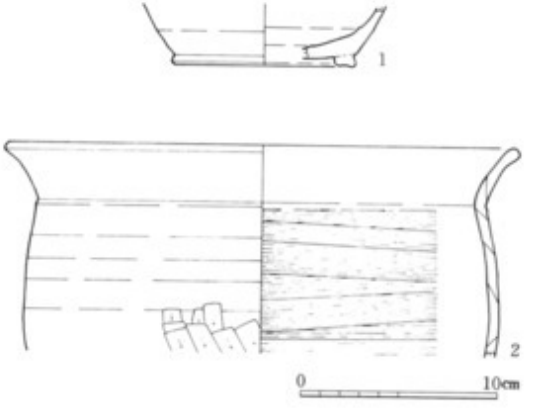
5号住居跡は4号トレンチで検出した。遺物は認められなかったが規模は3.5m位と考えられ

第11図　3号住居跡出土遺物2

る。

その他の遺物（第12図）

平安面からの出土遺物は小片ばかりである。1は灰釉陶器の長頸瓶の底部である。



第12図　4号住居跡・その他の遺物

(2) 中　　世

この時代に属する遺構は、調査区北東部から竪穴状遺構１基、井戸１基、土坑・ピット30基、火床２基、柵列２本を検出した。調査区北西隅から南東隅へと、幅２ｍ前後の礫群が土手のように検出された。土手は人頭大の礫と土で盛り上げられたもので、平坦面と緩斜面の境に設けられ、遺構はすべて平坦面上に位置していた。平坦面側の中世面に相当するII層面は、上方の数cmに焼土や炭粒が全体に多く含まれていた。出土遺物は少なく、総合的に15～16世紀代の所産のものと思われる。

竪穴状遺構（第13図）

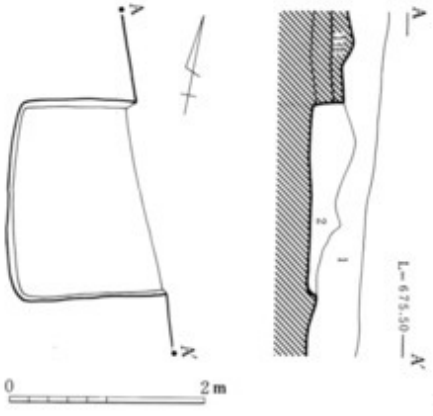
II層上面で検出した。ほぼ東半分は調査区東端にかかり、平安時代の１号住居跡の南壁の一部を切っていた。平面形は方形を呈すると思われ、南北を主軸方向にN－11°－Wを指す。規模は一辺2.4ｍで面積は約3.8m²位と推測される。壁の残存高は約８～32cm前後をはかる。

床面は平坦で、掘り下げた面をそのまま床としている。柱穴・ピット等は検出されなかった。覆土は、黒褐色土（10YR3/2～2/2）で１～５cmの礫と炭・焼土を含む。遺物は出土しなかった。

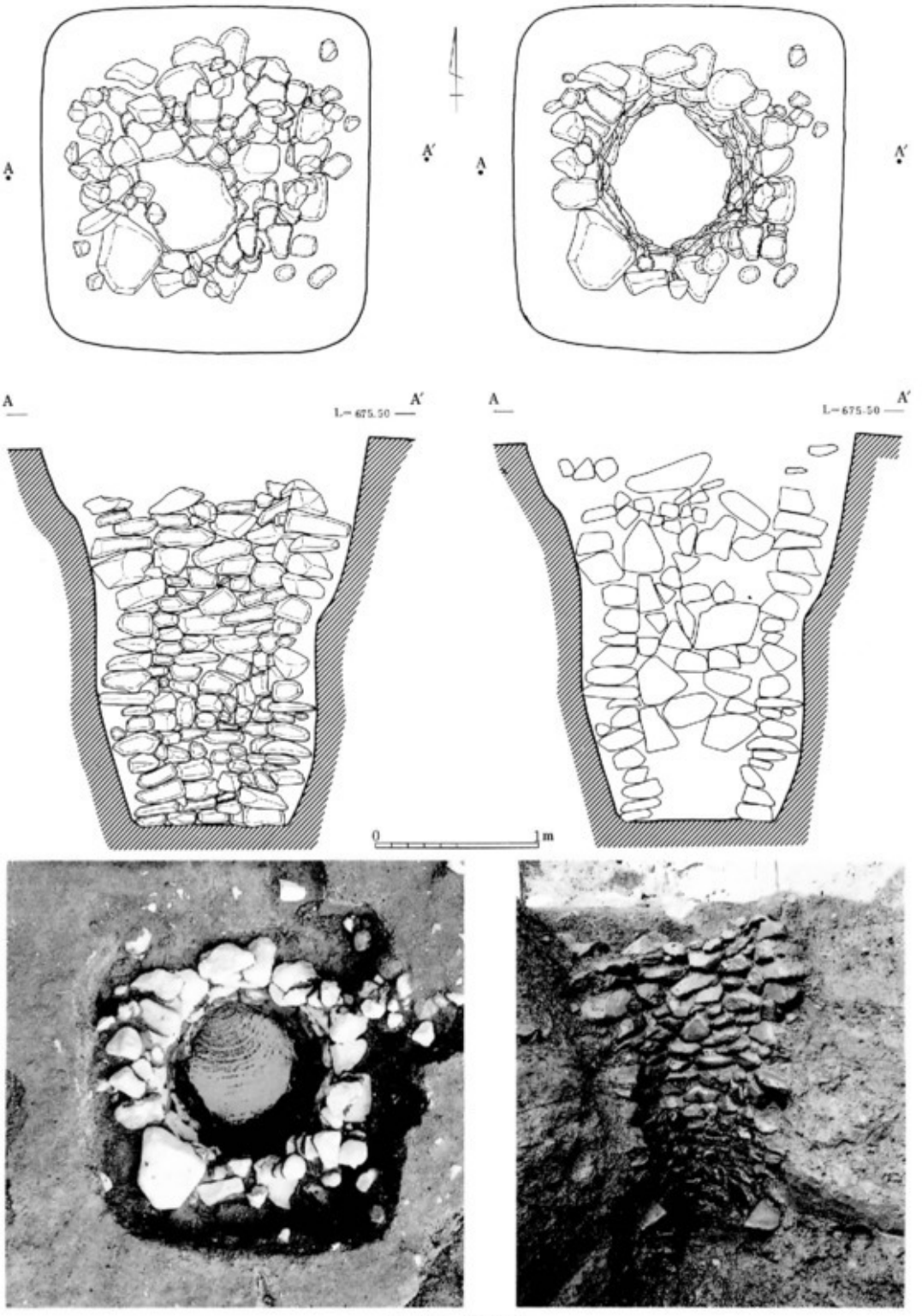
井戸跡（第14・15図）

調査区北東隅に位置し、II層上面で検出した。掘り方の平面形は上方を方形に、下方50～60cmから下は円形を呈する。上方は東西南北方向を意識してつくられていた。検出段階では竪穴状遺構と判断し、掘り下げ中も中央に多量の石が投げ込まれていたため同様の考えで調査を続行した。上方の礫を取り除いた段階で環状に並ぶ石を確認し始めて井戸であることが分かった。

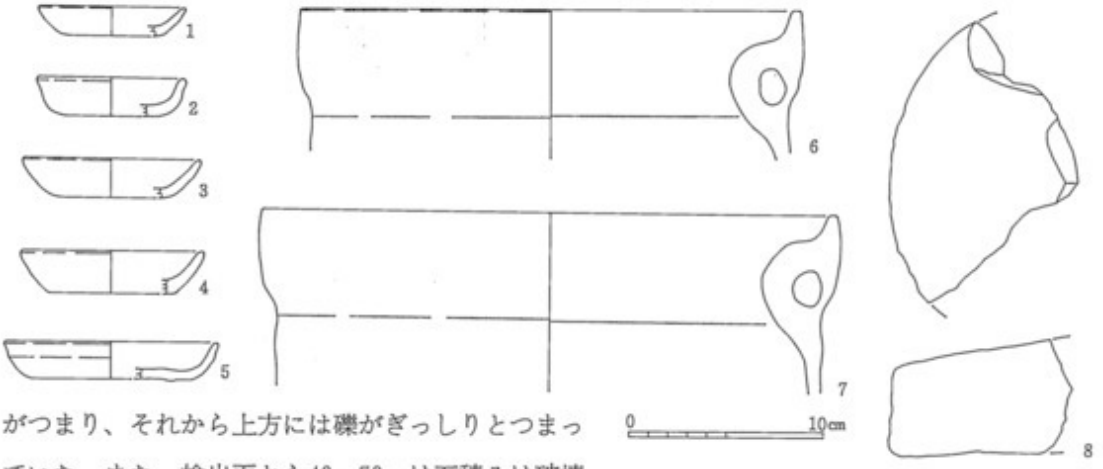
井戸底は不透水層まで掘り下げられ、扁平な礫を使って積まれ、隙間には小石が詰め込まれていた。内径は上方で約１ｍ、底で約50cm。深さは約2.4ｍを測る。井戸内は、底から50cm位には土



第13図　竪穴状遺構

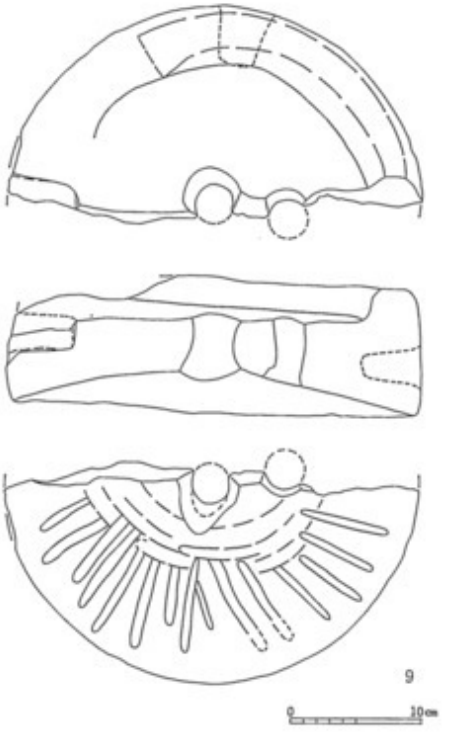


第14図　井戸跡



がつまり、それから上方には礫がぎっしりとつまっていた。また、検出面から40～50cmは石積みは破壊され、残骸は井戸内にほうり込まれていた。

遺物は井戸の底の土中から土師質の内耳鍋の破片（6・7）が出土した。それらの外面は真っ黒に煤ぐれていた。そのほか、焼土や炭、土壁が焼けたようなものが多量に含まれ、鎌または鉈のうような刃物ので切られた木の枝が数本出土した（第Ⅴ章）。



第15図　中世の遺物

土　坑（第16図）

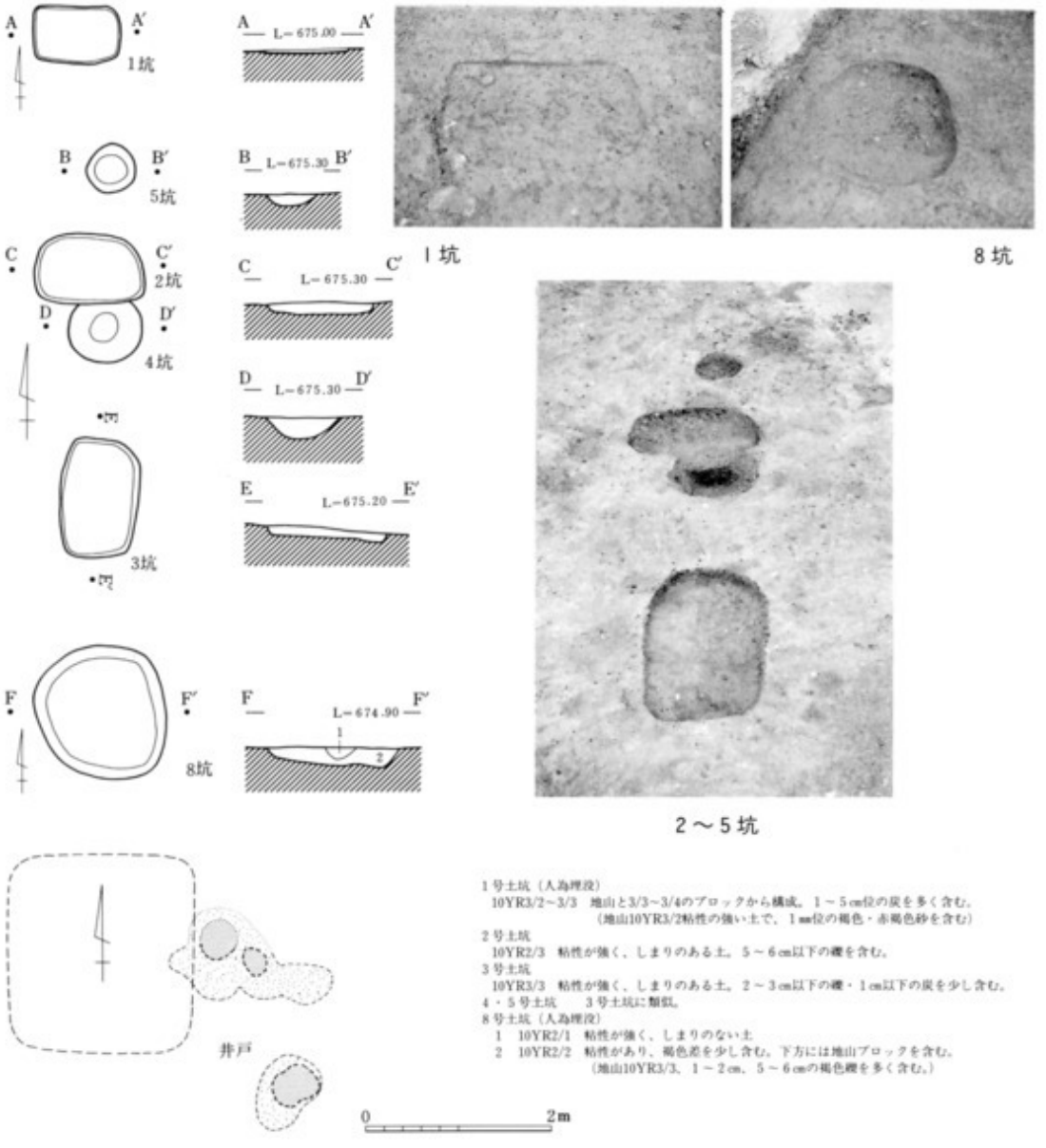
直径50cm以上のものを土坑とした。土坑には3種類に形状が別れる。一つ目は平面形が長方形を呈するもので、1・2・3号土坑がそれに相当する。長軸1～1.3m，短軸65～90cmを測る。二つ目は平面形が円形を呈するもので、4・8号土坑がある。三つ目は方形を呈し、ピットよりやや大きなもので、5・6・7号土坑がある。

火床跡（第16図）

埋められた井戸の東壁上と井戸の南東から2か所検出された。

柵　列（第17図）

ピットの平面形はすべて方形を呈する。20～30cmのものと40cm位のものに2分類することができる。中でも大形のものには柱痕が認められるものが多く、P_1～P_3は東西に並ぶ、また、机上で

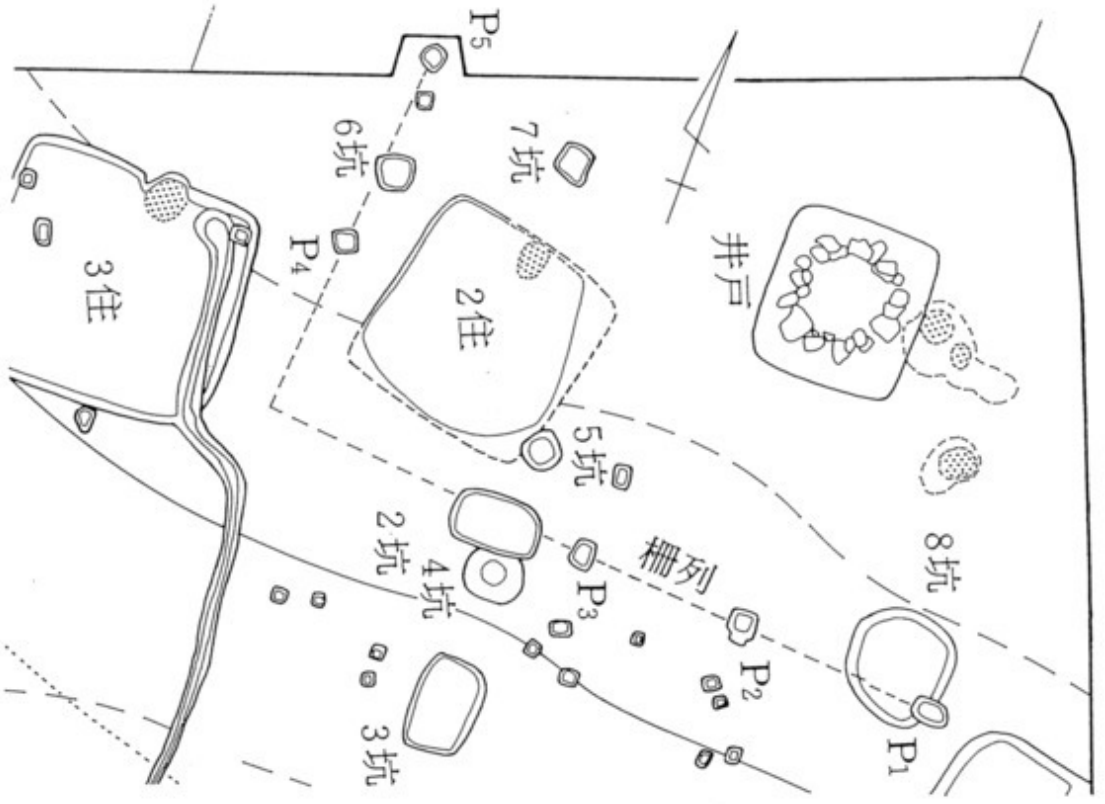


第16図　土坑・火床跡

はあるが同規模のピットP_4・P_5を結ぶ線とP_1～P_3の延長線とは直交する。

その他の遺物（第15図）

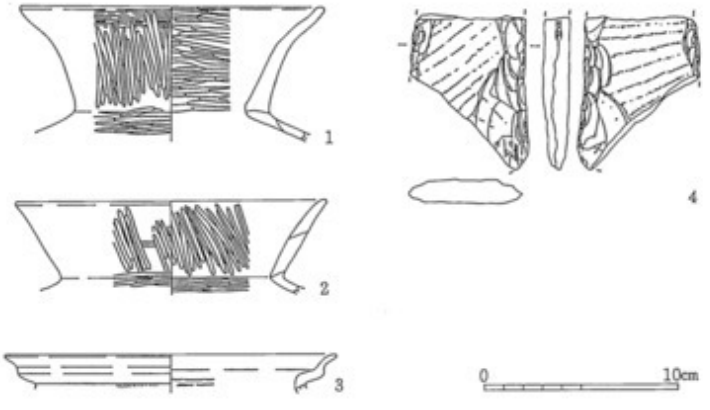
II層上面は中世面で遺物は遺構外から多くはないが出土した。土器はかわらけが5個体分出土したが全て小片である。すべてロクロ成形によるもので大（5）・中（3・4）・小（1・2）に分類される。調査区の北東隅付近からは粉挽き臼が2点（8・9）出土した。石臼は上臼（9）と下臼（8）で両方とも刻み目はほとんど摩滅しており、上臼は煤ぐれていた。



第17図　柵　列　0　5m

(3)　その他の遺物（第18図）

このほかに遺構は検出されてなかったが異なる時代の遺物を検出した。土器では平安時代の面とⅤ層から古墳時代前期の内外面ミガキを施した「く」字状口縁平底甕が２点（１・２）、１号住居跡内からの出土であるが、Ｓ字状口縁台付甕の口縁部小片（３）が出土した。石器では打製石斧が１点（４）出土した。



第18図　その他の時代の遺物

第Ⅴ章　井戸内出土の自然遺物

中世井戸跡は人為的に埋め戻されていた。だが、底に堆積した40cm位の土は砂質土と泥土が交互堆積し、当時の自然遺物が保存されている可能性があったため、興水太仲氏に土中遺跡の同定を依頼した。以下、検出された自然遺物を主体に記する。

昆　虫

ゴミムシ類　10点	小甲虫脚節４種　４点	ヌレチゴミムシ類　１点
ゴミムシ　９点	ミズギワゴミムシ類　３点	セアカオサムシ　２点
アオゴミムシ　１点	ナガゴミムシ類　１点	ツヤゴモクムシ類　１点
アオオサムシ　１点	オサムシ科　２点	ムナクボエンマムシ類　１点
ハネカクシ類　７点	エンマムシ類　２点	ルリハムシ類　１点
ハネカクシ　14点	ミドリトビハムシ類　１点	マメコガネ類　１点
ハムシ　１点	ゾウムシ類　１点	マメコガネ　１点
クロルリハムシ類　１点	甲虫脚節　５点	

比較的多いのは、ゴミムシ・オサムシ・ミズギワゴミムシ・ゴモクムシなどです。これらは地表生の甲虫で、種としては極めて普通の種で、家のまわり（現代では少ない）に多いものである。次にハネカクシは、少々ゴミだめや堆肥の近くまたはこれに類する畑地面に多く、種類も個体数も多いため、分類も未知の種が多いものである。これらが多かったことはこの付近がこれらの虫の住み心地よい雑物の多いところだったと想像される。エンマムシは珍甲虫ではないが、ハネカクシと同様なところを好み、小さな虫を食べる食肉性甲虫である。この虫は現在意図的に探しても採取が困難で、原因はえさとなる小虫が少なくなりエンマムシにとっては食糧難による個体数の推移かと思われる。ハムシ類は付近の草木の葉についてこれを食べるもので、当然いろんなものがいてよいはずである。ゾウムシは、枯木をねらって集まり、薮状のところや、大小を問わず枯木のあるところにはほとんどみられる。

木炭片

ヒノキ　ヒノキ科、カシ　ブナ科など

木　片

A：ヒノキ　ヒノキ科（長さ約30cmの木片） B：樹皮　マツ科マツ属、（アカマツ）

軟　体

ただ一個マルタニシ（食用にする。俗に言うタニシとはこれを示す）が出土した。殻は溶解し表皮だけが残っていた。タニシは井戸の中で永年生存は不可能。別地のものを採取して食用とした殻が埋まったと考えられる。

種　子

1	イネ（コメ）	2	ヤエムグラ（果皮）	3	サナエタデ、タデ科		
4	イヌタデ、タデ科3点	5	ドジョウツナギの一種	6	カンガレイ、カヤツリグサ科		
7	カヤツリグサ、カヤツリグサ科	8	サンショウ、ミカン科（未熟果実）				
9	シソ科、種子半分						

コメは別とし、No.3・4・5・6・7などは、多少なり湿性地を好む植物で近くに湧水地があるか、年間他より湿度の高い地面がありここに自生していたものか、または、イネと共に運ばれてきたものが、風または雨水かによって流入したものではなかろうか。No.8は今でも人家の近くに植栽し食用として風味を味わう材料で、少々昔では大切な香辛料として欠かせないものであったことから栽培してた可能性がある。No.9は、シソ科植物である。食用のシソともみられるが、種子だけでは判断できない。食用外種であれば、畑地まわりに多くある種である。

壁土の土塊

壁土としたのは、この土塊をつぶさにみると、イネ（ワラ）やモミ（エイ）が混入し、丹念に練られた土ともとれる。しかも精製した土でなく、砂粒なども含まれて、人工的な土質の感が強い。さらにいくつかに熱をうけた形跡がみとめられたり、水中にあっても溶けず、故意に粉砕しようとしても壊れない硬さであったことなどによる。

『井戸内の包含物からみる旧環境』

周辺は山林に囲まれた田や畑のあるのどかな斜面の人家、水田や畑まわりは今の様に風の通るようなところではなく、おだやかな所であった。ここに土壁の家屋が並んでいた。その屋敷の片隅には、年間枯れることのない湧水地があり、あるかないかの流れのために、付近の地面はたえずうっすらと湿っていた。この地面は丈の高からずの湿性草木が生え、草むらは人の通路だけ地面が見え隠れしていた。家のまわりは畑地でこの隅には、食後の投棄物であるタニシをはじめ、雑多なものが作物の有機肥料として捨てられ、すでに土に返りつつあるところもあった。

これらの地表は、ゴミムシやゴモクムシ、はてはハネカクシにとって最適地でちょっと地表物をのけると、むらがって生息していた。畑地や家まわりには、大小の樹木が点在し、その根方に

はボヤともつかぬ枯れ木が放置され、朽ち果てるのを待っていた。一方幹下の一角にはサンショウなどの小木が植栽され、小さな薮を作っていた。

雨の度にこの地面を雨水が流れ、時に大量の雨水は地面のゴミ（昆虫や種子）を運んで井戸に流入し堆積させた(このことは砂質土と泥土との交互堆積がみられることによる)。その度に種子や昆虫片は層の中に堆積保存された。あるとき井戸の近くに火事または故意に建物を焼くようなことがあり、この時一部が壁土と火とが共に井戸の中にも及び水中の堆積をはやめた……。

第Ⅵ章　総　　括

今回の寺田遺跡の発掘調査で明らかにされた成果について述べてきた。最後に時代別に成果を総合して結語に変えたい。

1　古墳時代前期まで

遺物は数点出土したのみで遺構は検出しなかったが、近年の発掘調査において布施川沿いは縄文時代から中世まで連綿と利用されてきていることが分かりつつあるなか、猫の額にも満たないこの遺跡で、該期の遺物が見つかったことは布施川流域にかなり多くの遺跡があることが推測された。

2　平安時代

9世紀から10世紀前半にかけての住居跡を5軒検出した。同時期に1軒ないし2軒が同時存在すると思われる小規模集落であった。1・3号住居跡のように床下から湧水があるような湿気った場所にまであえて住居を建てることは、憶測すると布施川流域沿いにはかなりの住居が営まれていた可能性も指摘できるものと考えられる。また、1号住居跡出土の四耳壺からは御牧原台地で盛業であった須恵器生産の工人たちとのつながりも若干ではあるが想定された。

3　中　　世

江戸時代に入り中仙道が設置されるまでは布施川左岸流域に中世の集落があったとされている。今回の調査では井戸・竪穴状遺構・柵列が検出され、規模ははっきりしないものの屋敷があったことが推測され、屋敷は調査区の北側（山側）へ延びているものと思われる。また、屋敷が想定される場所は崖錐地形で山側に行くにしたがい厚い堆積があるもはと思われることから、段状の屋敷地が広がっていたのであろうと推測される。

引用参考文献

佐久考古学会　1990　『赤い土器を追う』
寺島俊郎　1991　「古墳時代末から平安時代の遺物」
『上信越自動車道埋蔵文化財報告書2』㈶長野県埋蔵文化財センター

浅科村文化財報告書

第１集　『土合１号墳の調査』（1993年）

第２集　『矢嶋城跡』緊急発掘調査報告書（1985年）

第３集　『五郎兵衛用水』矢嶋城跡腰曲輪部に開した用水路の調査（1987年）

第４集　『矢嶋城跡』第２曲輪部の建築遺構（1991年）

第５集　『矢嶋城跡』主郭部の調査（1991年）

第６集　『砂原遺跡』洪水に埋もれた耕地と古代の村（1993年）

浅科村文化財調査報告　第10集

寺田遺跡

――古東山道・中仙道沿いの村――

発　行　1995年３月31日
発行者　浅科村教育委員会
印　刷　ほおずき書籍株式会社